

婦依された一方、「單聖道門の人、單淨土門の人は、之を知る可らず。聖道淨土兼学の人は之を知るべし」と云つて、二門兼学を唱道されている事によつても知る事ができる。

西山教義の研究

特に正因正行を中心として

川本泰弘

阿弥陀仏を念ずるにあつて、願行といつたり、安心起行、または信行といつたり、それが心に在ると願とか安心、信ともいい、それを行為に表わしのを行とか、起行などというのである。これと同じ意味を持つものに、「正因正行」という名目がある。一つの事をいい表わすのに色々の名目を用いられるのは、其の事を言い表わすのに、その時とか場合に應じて色々と變つてくるのである。正因正行は、饑無量寿經に三福九品を以て淨土往生

の正因正行となすということによるのである。善導大師が觀經の正宗分散善義第四に、

「解三輩散善一門之義、就此義中即有其二一明三福以為正因二明九品以為正行。」

と言はれている。この場合は阿弥陀如来を念ずる事を、三輩散善の一門に望んで解せんとするのに正因正行という名目が必要なのである。これを証空上人は、「正因正行」の名目を用いて、教義上の問題を批判されたのであつて、この「正因正行」の名目は「觀經散善義他筆鈔」に最も多く用いられている。それでは、正因とは何んであるか、正行とは何であるかという事については、「他筆鈔」上巻に、「凡正因者。直因。即因也」とあり、また「然正因正行。直因直行也。」とも解釈されている。三福正因を総体、九品正行を別相として、これに依りて彼の土の得果にもまた、果と報との別があるとするのである。総体と別相の別である。すなわち自力を脱却した他力の総因を正因といい、他力の別因を正行というのである。三福を以て正因とし、九品を以て正行と為すという語に証空上人の解釈に二つある。その一

つは、觀門要義鈔であり、もう一つは他筆鈔がある。觀門要義鈔の解釈は、三福九品の開合を教主釈尊の立ち場から見た批判である。他筆鈔の解釈は、釈尊の語に説き表わされた阿彌陀如来の立場から、正因正行とは何であるかを明らかにしようとするものである。このように一つの法門に二つの解釈があるゆえんは、善導大師が、この觀經を二尊教とせられて、釈迦は要門を開き、彌陀は弘願を表わすという事によつて始まる。だから弘願は要門に対する語であつて、この要門なるものは、これ釈迦の説かれた教えであるから、これを釈迦教という。引願は彌陀の説かれた教えであるから彌陀教というのであつて二尊二教の説である。淨土宗西山派では彌陀他方の本願を極力主張するのである。「善の体が正因正行なるにあらず」というのであるから、三福正因、九品正行と云うのである。「三福を明し、九品を明す道理觀門なる故」とも、「能詮の教」ともいわれたのである。彌陀教としては初めから正因正行の名も無く、ただ大慈悲あるのみであるが、人がそれに攝取される時に、三福が正因となり、九品の行が正行となるのである。これを言葉に言い

顯わしたものが釈迦教で、人々の実行であるようになつた所が、「所謂願力所成の益」なのである。釈迦教の歸結は弘願の彌陀教にあるという事が出来る。要するに弘願の功能すなわち、阿彌陀如来の慈悲が人に徹底する。これを全体から見て、正因といい、別々に見て正行というのである。正因正行の區別に、「慈悲」「善惡」「往生」等にも區別がしてゐるのは、証空上人が教義のすべの上にも適用されたものであるから、西山派は安心なる三心すなわち仏体即行の謂れを知る他力領解の心を報土往生の正因とし、九品に説かれた、定散諸善諸行はさらに、往生を得た者の信後の行修としたのである。三福は他力の教えの三福であれば、皆往生の正因とし、これを實際に行ずればこれを九品の正行と云うのである。三福正因の文は、序分にあるが、自力であればそれは、正因の義ではない。正宗分の三心念仏を通して、初めて淨土正因となる事を散善善の初めに論じている、この三福と正因が合した時が安心である。九品正行を開いた時が起行である。正因正行は阿彌陀仏を念ずる為にもちいられた。この「正因正行」は、初めは善導大師の釈に出たもので

あるから、証空上人の私創ではない。しかし、これまでに意義を拡大されたのは、証空上人であるから、「正行」という名目は、証空上人の創といえる。

法然上人の人間観について

——特に罪惡觀を中心として——

井 関 隆 清

この罪惡思想は多くの問題が残されている。卒論としては、法然独自の罪惡觀の中心がどこにおかれたかについて論じた。今は未完のまゝではあるが、提出した卒論の序論とも云うべき箇所をそのまま記しておく。

業思想がインド、中国、日本と次第して渡り來つた變遷は大體身口意の三業として考えられ、又行じられて來たのであるが、特に淨土教に於ける業思想は、この身口意三業中、特に意業を中心として、それが阿彌陀仏に対する絶対帰依の心情から業を、キリスト教の原罪意識と

相通じた所の因を持つようになつた。勿論淨土教における罪の意識は、己れ自身を惡と見なす所に、その起源が見出されるとしても、それは淨土三部經、特に無量壽經に於ける第十八願文に依る救済、あるいは三輩、五惡段と称される淨土教の倫理綱、又御無量壽經に於ける晝提希夫人の凡夫觀、上中下の九品往生に説かれる淨土教的人間觀、等これらを基として淨土教の罪惡觀は展開してゐるのである。これらの思想を中心に行じ、あるいは魂の遍歴の後に、弥陀の慈悲を感得した人々は数多くあるとしても、特にその罪の意識を明確にした人々は中國に於ては曇鸞、道綽、善導と言つた淨土教の祖師方であり日本にあつては源信、法然あるいは親鸞と言つた人々である。今淨土教と言う大きな器の中で、その歴史的に宗教的要素の濃い礎石を造つた法然に於ける罪惡意識は如何なるものであつたか。

現代に於ける罪惡觀の見方は親鸞の罪惡思想に基づくものが多く、彼一人が、その意識の第一人者であるが如くに理解されているような感がある。親鸞と言へば罪惡意識を代表すると言つたような、實に彼にあつては、そ